

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	紀元前五・四世紀のアテナイの観客
Author(s)	三浦. 一郎
Citation	茨城大学文理学部紀要. 人文科学(2): 23-29
Issue Date	1952-02
URL	http://hdl.handle.net/10109/10091
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

紀元前五、四世紀のアテナイの観客

三浦一郎

(史学研究室)

この小論は私のギリシア劇研究の序説の、又ほんの一部である。歴史家としての私のギリシア劇研究の目的は、勿論ギリシア演劇自体の探求に止まるのではない。ギリシア劇の芸術的研究、語学的研究等は私の能力の限界外にあり、又探求の目標でもない。そうした研究領域には我が国にも優れた研究者が多勢居られる。私の志すところは演劇のように端的に民心、風俗、習慣等を現わすものによつて、ギリシア社会を生きた姿に於て、ありありと把握することにある。従つて私の語学力ではそもそも味い得ぬギリシア劇の詞章の芸術性などは余り問題ではなく、演劇と政治との関係、社会教育機関としての演劇等の問題の方が数段重要な問題となる。

このような立場から研究をなす以上、文学研究とは違ひ、ギリシア劇の観客数やまたそれを構成する人々の種類等が可成り重要な問題になつて来る。ギリシア悲劇のあの深い人生観照も、運命観も、又倫理観も、二、三百人の選ばれた人のみを相手にして語られた高踏芸術であつたのならば、それが今日から見て如何に驚くべきものであつたにしても、さほど不思議なことではない。又喜劇の政治諷刺が如何に強烈なものであつたとしても政治に対して直接の関与権を持たぬ女、子供のみを相手にして上演せられたものであつたならば、大した問題ではない。

ギリシアの演劇は單にその上演の形式——国家的宗教行事の一部——、その内容——悲劇に於ける神話、伝説の宗教的、哲学的取扱ひ、喜劇に於ける時事問題の極端に政治的な取扱ひ——等からのみ見ても、何時の時代の如何なる国の演劇とも比較にならぬ教育力、政治との相関を持つていた。従つてアリストパネスのように、外国人の前に自国の悪口をいつたと訴えられる者まで出るのである。しかし、ロードのいうように「アリストパネスの『平和』の上演と『ニキアスの和』は関係がある」と考へるのも極端過ぎはせぬだらうか。^(註4)

この答も亦、観客に就いて知ることによつて、可成り明確にし得るものではなからうか。この小論はこのような意図から、ギリシア劇の観客の構成者と、数を研究した一試論である。ギリシアは周知のように、各自個性を持つた小ポリスが分立していた。従つて、各ポリスにより、観客の数も種類も変化があつたらう。又同じギリシアでも時代によつて変遷があつたらう。しかし今は、ここに民主政盛期のアテナイに限つてその考察をしてみたい。なほ、私の参照し得た文献はやゝ古く、欧米の最近の研究の成果は入手し得なかつたので、この小論はその点からも大変不備なものであ

る。この一文は未完の研究の一部分の報告である。識者の御示教を得たい。

一、観客の種類（入場の資格を持つ者）

a. 市民 これは勿論第一の有資格者で論議を要しない。元来、ギリシアに於ては周知の如く、演劇はディオニソスのために催された国家的、市民的祭日の行事の一部であつた。従つて入場料は本来徴集せらるべき性質のものではなかつた。しかるに後述するように、非常に混雑し、思わぬ椿事さえ起つた場合もあつたので、やがて二オボロスの入場料が、整理のため徴集せらるゝに至つた。しかし、もしもこの入場料を支出できぬ為に観劇も出来ぬような貧民があるとすれば、非民主的だとアテナイでは考えられたので、この入場料は国庫から支給せられた。^(註5)従つて原則的には観劇したいと望んで貧しい為に観劇し得なかつた市民はなかつたわけである。しかし、地理的な理由から、アッティカの田園に住む市民よりも、アテナイ及び、その港市ペライエウスと、その附近に住む市民の方が観劇しやすかつたろう。

さて、このように彼等市民は問題ないのであるが、その他の者になると、議論が分れ、今もつて決定的な説は確立されていない。

b. 女 これに就いては種々の見解があり、諸説紛々であるが、大別して三種に分けらるる。

第一の群は全然観劇が許るされなかつたとする者で、ベティガト、ベルグク、ワッハスマート等である。^(註6)この説を先づいゝ出したのはベティガーである。その理由とするところは、アテナイに於ける婦人の地位の一般的低さと、劇の内容からの推定であつて、この見解に対して積極的な反証のないこともその理由の一つとなつてゐる。^(註8)

第二は悲劇は良いが、喜劇は許るされなかつたとする人々で、ベルンハルデイ、ベエック、マイネッケ、パソソウ、シユワニツ等であり、喜劇の内容の極端な淫猥さからこの説をなすのである。^(註9)

第三は特別の婦人は認める者。この説の人としてヘイはミュラーを数えているが、私の読んだところではミュラーは後述するように普通の女の入場をも認めている。特別の婦人というのは巫女、白拍子、貴婦人等を指すのである。巫女 *weia* これはその社会的地位から見ても殆んど確かである。又、実際プロエドリヤ *Proedria*（劇場の最前列の名譽席）の碑文に、彼女等の名が認められる。^(註11)白拍子 *scapara* もヘレニズム時代には確實に^(註12)いる。悲劇には貴婦人がいたらしい。^(註13)

ところが反対に上流婦人の入場を認めないマイエルのような者もいる。彼の説に直接當ることが出来なかつたが、恐らくその根拠をなすものは、やはり婦人全般の入場を認めぬ人々の理由とするところ——主として婦人の地位と劇の内容——と同一であろうと思われる。^(註14)

c. 少年 これは大体bと関聯して、女の入場は許るされなかつたとする者は少年の入場も許るされなかつたとし、婦人は悲劇の観劇は許るさ

れたが、喜劇のそれは許るされなかつたとする者は、少年もそのように考へる。但し、ロジヤースのように少年は認め、婦人は認めぬ例外もある。^(註15)
ベディガーは十八才になつてエペベに入つてからは良しとする。この場合にいえることはロジヤースのように少年と婦人とは引離して別個に考へるべきだと思はれるのに、そのような考察が充分になされていぬということである。

d. 外国人 外国人の中でも殆んど定性的になつていたメトイコイ等は余り問題でない。彼等の入場は許るされたと思はれる。但し、純粹の外国人の問題である。小祭レナイア祭には入れなかつたが、大ディオニシヤ祭には許るされたと思はれるのが普通である。^(註17) その場合も公的な資格を持つた者——同盟市の使節、^(註18) 貢納者——は論外にあるが、公的な資格を持たない私人としても入場し得たかどうかは少々疑問がある。^(註20) 時代が下つてからはほど確実である。しかしその場合も市民に入場券を買つてもらつて入つたらしい。^(註21)

e. 奴隸 詳細は不明。奴隸という地位から見ても疑問が多い。これも後の時代になつてのことだが、従者として主人に附いて行く場合のあつたことが知られている。劇場の座席が固いので、奴隸に座蒲団等を持たせて連れて行つたのである。^(註22) しかしそのまゝ奴隸も劇場に残つて観劇したかどうかは不明である。従者としてでなく、自分等のみで行くことが出来たかどうか不明である。ハイやミユラー、ベッカー等は奴隸が各自個人として行くことも出来たとする。

以上大体当時の住民の構成要素の一つ一つに當つて、諸説を紹介したが、何等の制限をも認めず、誰でも入場出来たとする人々もある。ハイ、ミユラー、ベッカー等である。彼等がその証として挙げる史料は多数あるが、大体は私がこゝに問題としてゐる時代よりも下の時代のものが多い。今こゝにこの時代、及びそれに近い時代の史料の中から主なものを挙げよう。

先づ第一にプラトンの「ホルギアス」中の一文 (Platon, Gorg. 502D) が普通に挙げられる。^(註24) 次にアテナイオスに引かれてゐるサテュロス (Satyros, ap. Athenaios xii. 534 C) が挙げられる。その他プラトンの「法律」中の章句 (Platon, Leg. ii. 658 A-D; vii. 817 A-C) が引かれる。^(註26) アリストパネスからは沢山の箇所 (Aristophanes, Nubes 537-9; Pax 50, 765-6; etc.) が挙げられる。^(註27)

ところがこれ等の文献も學者によつて解釈が異なる。例えば第一のものをベッカーは「この箇所は必ずしも事実として述べられてゐるのではない」としてゐるが、ミユラーはソクラテスの言葉の中に *À èu tois deatpous* とあるから劇場の観客を明らかに指すとす。又、反対にアテナイオスの引いたサテュロスにベッカーはこれこそ証拠といつてゐるが、ミユラーはこれは恐らく劇に関係しないとしてゐる。その他アリストパネスの「平和」(765-6) 中の句には「少年達男達」とあるので、ロジヤースは女が見なかつた証としてこの箇所を挙げ、ハイは女はいたのだが少数だつたので特に挙げなかつたのだとする。^(註29)

以上のことから判るように、観客に何等の制限なしとする人々の挙げてゐるものも、消極的な史料のみで、同じ立場の者でも人によつて扱い方

が異なるのであるから、断言的なことは何等いゝ得ないのである。但し、積極的に彼等の説を支持する証拠もない代りに、反対者の側には一層それが欠けている。私の読み得た書物の多くが、観客に制限なしとする立場のものであつたことも、大いに考慮せねばならないが、今は観客の資格に制限はなかつたらうと考へて置きたい。殊にこの時代から下るに従つて、特にヘレニズム時代に至つては相当断言的にそう考へ得ると思ふ。

制限は恐らく何もなかつたらうと考へることは、文献的な史料がたとえ無くとも、ギリシア劇のギリシア社会に於ける位置を考へるならば、そうむづかしいことではないのではなからうか。すなわち周知のように、ここでは劇の上演は宗教的行事の一つであつた。女や子供の喜劇の観劇は許るされなかつたと考へる人々は、その理由に喜劇の淫猥さを挙げる。ベッカーのように何等制限なしとする人も、息子の観劇を喜ばない父親がいたろうと書いている程^(註30)。確かにギリシア喜劇はその構想にも、その章句にも、役者の服装にも淫猥さが満ち満ちていた。淫猥さの少いことを自ら誇るアリストパネス (Aristoph. Nub. 537-9) の作品すら、今日我々の常識から見れば想像を絶した淫猥さに溢れている^(註32)。

しかし、喜劇の起源を考へれば、この場合にはむしろ淫猥なことこそ神に敬虔な所以であつたとヘイの如きことこそ正しいのではなからうか。そしてヘイが喜劇の起源になつたコモスに女、子供の加わつていたことから喜劇の観劇にも制限がなかつたに相異ないと想像することも自然ではなからうか。喜劇の淫猥さの故に少年や婦人の入場が許ると考へることを躊躇う者は、今日の常識から二千四、五百年前を推し量つていとヘイに笑われてもしかたのないところがある。又悲劇に婦人の入場を認めぬ者もいるが、別に悲劇に男は見ても良いが女は悪いという点はない。喜劇の場合以上にその理由は発見にくい^(註36)。

これ等の点からも観劇の資格に厳重な制限はなかつたと考へた方が自然だろう。但し、原則的にはそうだつたらうが、実際の観覧席の様子は又異つたものがあつたらう。ヘイも実際の観客は大多数は市民であつて、女、子供、外国人、まして奴隸は非常に少数であつたらうと考へている^(註37)。当時の婦人の社会的地位、その他を考慮する時、恐らくは男達が劇場に行つてゐる間、女は家にいる方が、多く普通の場合だつたらう。但しこれもヘレニズム時代に至つては様子が大いに違つたらう。

二、観客数

これに就いても勿論決定的なことはいゝ得ない。非常に多数の者が観劇したろうことは、彼等の劇場愛好振りからも知られる。しかし、もう少し具体的に観客の数字を知ることには出来なからうか。アテナイの観客数として普通に挙げられる数字はプラトンの三万である^(註40)。しかしこの数は一般に慣用的な誇張的なものと見られている^(註41)。アリストパネスやヘロドトスはこの数字をアテナイ人全体の数として挙げてゐる^(註42)。それでは何を手懸りとして、より正確な数字を見出すべきであらうか。その一つの試みとして、現在残つてゐる劇場の遺跡の收容人員を検査する必要がある。もつとも今日の

ギリシア劇場の遺跡は、いづれも四世紀後半以後の建造にかゝるものである。^(註45) アテナイの繁栄はむしろそれ以前にあつたが、それ以前の木造のものが、今日發掘されている石造のものより、より大であつたと考えることはむづかしい。恐らくは大部分、以前の木造のものと同程度の規模に建てられたものである。

木造、石造のものゝ收容人員の差の問題は兎も角一時論ぜず、論をこゝでは進めよう。さて、遺跡を実測すると、アテナイのディオニソス劇場は約一万七千の收容数を持つてゐる。^(註44) その他の劇場も大体同じ位である。^(註45) しかしこの場合はいづれもぎり／＼につめて満員にして算えた数字ではない。大体一人前の席の幅を十三呎づゝと考へて割り出した数である。現在の劇場では十四呎あれば足り、十六呎あれば葉だそうである。従つてこの数は相当ふくらみを持つ、多くも少くもなし得る数である。

スイダスによつて木造の劇場が超満員のために崩壊し、永久的な建造が要求せられたと伝えられているが、^(註46) このことから知り得るように非常に多数の人々が観劇したとしても、先述した收容数では、如何に超満員でも二万を超えることはなかつたと推定してよからう。

そこで観客数を約二万と推定して、次にその数と当時のアテナイの総人口数との比例を出すならば、当時の演劇の影響力のある一面はうかゞえるのではなからうか。それではアテナイの人口はどれ位あつたのであろうか。ペロッホは紀元前四三二年にアテナイとペライエウスにいた市民との家族を三万と数え、^(註47) ギンムは同じものを六万と数えている。^(註48) 上述の如く、他の分子が混入してゐたとは云え、純粹の市民が観客の大半を構成してゐたらう。ギンム、ペロッホの数から推して、純粹の市民は一万から二万位であつたらう。この数は先述の劇場の遺構から推算した観客数と大体一致する。従つて市民は大部分観劇したと考えられる。

当時の市民生活は現代のものに比べて、ずつと娯樂が少く、演劇は競技と並んで、市民の娯樂の大きなものであつたらう。又傑作の詞章が人々の会話に用いられることが多かつたことから、劇が人々に共通の話題となつたことは推察される。これらのことも市民は過半数の者が劇場に行つたらうという考え方の拠り所となる。しかし勿論何時の場合も例外はある筈である。野天の窮屈な劇場に、早朝から晩まで三日間も続けて観劇するとは、如何にそれが宗教的行事であつたとしても、相当苦痛なものでもあつたらう。従つて早く途中で歸る者も、遅れて行く者も、^(註49) 中には家において劇場には全然行かぬ者だつてあつたらう。

さて、今までなしたところから、始めに設定した私の問題に如何なる答が与えられたらうか。観客を構成してゐたものが、大部分は市民であり、彼等は政治に發言權を持ち、役人や陪審員などになり、又は民会に出席して国家の行政に参与してゐる者が多かつたのである。^(註51) このことは婦人や青年達で多く占められている今日の我が国の演劇の観客と比較してみるならば、当時の演劇が観客に与えた影響力、又政治諷刺等の効果の適切さなどは相当のものがあつたらうと想像される。この点では今日の我々の常識とは可成り違つたものがあつたらう。アリストパネスの「鳥」のような優れ

た作品が第二等になるというような反面も、その代り避けられなかつた。兎も角観客の面からだけ見ても、ギリシア劇の近代劇との差異は驚くべきものがあつたのである。

(註)

- 1 これは古代人も自覚して居り、演劇を子弟の教育機関として考へていた (Lucianos, Anacharsis 22)。
- 2 Aristophanes, Acharnae v.497 ff.
- 3 Lord, L. E. Aristophanes p. 77.
- 4 「平和」 Pax 第四二二行、このキリオンに上載せられた平和を希求する作品。ニキアスの和は同年に結ばれた。
- 5 テキストの theorikon と呼ばれ、ソクレスの時代から始められた (Plutarchos, Perikles 9)。又は Aristoteles, Athenasion Politeia, 28, 3 参照。後には劇場の入場料のために支給されるばかりでなく、国書の市民全般への分配手段となした。
- 6 Böttiger, Kleine Schriften, I s. 295 ff. 308 ff. 313 ff.; Bergk, Griechische Literaturgeschichte, iii. s. 49.; Wachsmuth, Hellen. Alterthumskunde, ii. s. 391.
- 7 村川堅太郎氏訳「女の議會」序説及び Companion to Greek Studies. 664 (VII. 5. The Position of women, by W. Cornish.); Tucker, Life in Ancient Athens (田中秀次氏の邦訳) 等参照。
- 8 Müller, Die griechische Bühnenalterthümer, s. 291. Becker, Charikles (or Illustrations of the Private Life of the Ancient Greeks) S Met-calle, F. S 英語 p. 403 参照。
- 9 Bernhardt, Griech. Literaturgesch. ii. 2. s. 132.; Böckh, Trag. Gr. Principes. s. 37.; Meineke, Menand. et Philon Reliq. p. 345.; Passow,
- 10 Über den Theaterbesuch der athenischen Frauen in der Blüthezeit des Staates, Zeitsch. für Alterthumswiss. 1837, Nro. 29; Schwannitz, Platonische Studien. I. s. 25.
- 11 Haigh, The Attic Theatre. p. 328 note 2. Müller, Die griechische Bühnenalterthümer. s. 291 以下参照。
- 12 Müller, a. a. O. s. 95, s. 291.; Becker, a. a. O. p. 409.; Haigh, a. a. O. p. 327 参照。
- 13 Müller 註 C. I. A. III. 313, 315, 316, 319-323, 331, 335-340, 345, 349-353, 356, 357, 359, 361, 365, 367-376, 380-383 を讀むと 312, 324, 325, 327, 343, 358, 379 はその女性をとりとけ判るが、西女性であるか否かは判らぬ。Haigh は西女性をとりとけ C. I. A. III. 282, 313, 315, 316, 321, 322, 324, 325, 333, 342, 343, 350, 351, 354, 361 等を讀むと、その Gelzer, Monatsber. d. Berl. Akad. d. Wiss. 1872, s. 164 ff. 参照。同じくその女性をとりとけ問題として Müller は註 C. I. A. III. 282 後を参照。
- 14 Athenaios, IV. 157.; Alciphron, Epist. ii. 3.
- 15 Aristophanes, Ranæ. 1049-51.
- 16 Meier (Becker, a. a. O. p. 403 以下参照)
- 17 Rogers, Introd. to the Ecclesiastice.
- 18 Aristophanes, Acharnae. v. 507.; Müller, a. a. O. s. 289.
- 19 Aristophanes, Acharnae. v. 502-8.

- 18 Demosthenes, de Coron. §28, Müller, a. a. O.
- 19 *ἔπειτα*, Aristophanes, Acharnae, v. 505, 643 f. | s. 292. 参照。
- 20 Aristophanes, Pax, v. 45, Dem. Meid. §74.
- 21 Theophrastos, Char. 9.
- 22 Theophrastos, Char. 2, 9.
- 23 Haigh, a. a. O. pp. 325 ff.; Müller, a. a. O. s. 292; Becker, a. a. O. p. 408.
- 24 Becker, a. a. O. p. 405; Haigh, a. a. O. p. 326; Müller, a. a. O. s. 290
- 25 Becker, a. a. O. p. 406; Müller, a. a. O. s. 290.
- 26 Haigh, a. a. O. p. 326; Müller, a. a. O. s. 290; Becker, a. a. O. p. 406
- 27 Haigh, a. a. O. p. 326; Müller, a. a. O. s. 292; Becker, a. a. O. p. 407
- 28 Becker, a. a. O. pp. 405-6.
- 29 Haigh, Müller, Becker 等。但 *ἄντικα* は初期の喜劇では婦人は見ぬと云ふ。
- 30 Becker, a. a. O. p. 407. 又は Aristoteles, Pol. vii. 7 参照。
- 31 男役は赤い皮で作った異常に大きい一物を膝間に下げている等。
- 32 「女の議會」はその代表例。女子の共有が法令によつて定められたので、男子は老女を慰めた後に若い女と一儀に及ばねばならぬ。老女達に引つぱられる若く男の場など、適當な近代語訳の出来ぬ程である。
- 33 Aristoteles, Poetika, III. 又新聞良三氏「希臘喜劇の起源」(東京帝大演劇史学会編「演劇史研究」第二輯中)参照。
- 34 Haigh, a. a. O. pp. 327 ff.
- 35 Aristophanes, Acharnae v. 241-6.
- 36 Becker, a. a. O. p. 403.
- 37 Haigh, a. a. O. pp. 328 ff.
- 38 Aristophanes, Aves. v. 793-6; Thesmophoriazussa, v. 395-7.
- 39 Theopompos. (Justin. 17, 9 以下)
- 40 Platon, Symp. III. 175.
- 41 Haigh, a. a. O. p. 100; Müller, a. a. O. s. 293.
- 42 Aristophanes, Ecclesiazussa, 1132; Herodotos, V. 97.
- 43 Dörpfeld, Das griechischen Theater, s. 36 ff. そのから發掘される他の遺物(銅片等)を「Inscription 等」によつて建造年を推定する。
- 44 Dörpfeld, a. a. O. s. 45; Haigh, a. a. O. p. 100. この場合は一人分の幅を十六寸とすの計算。少しゆつたりと十九寸にすると一万四千人。
- 45 Müller, a. a. O. s. 293 は二万七千五百人としつゝる。
- Epidaurus 17,000 (Gardner の計算) Megalopolis 17,000 (Gardner), Schultz は Megalopolis を 18,700 としつゝる (以下 Haigh, a. a. O. p. 100 以下)
- 46 Suidas, *πρωτρωας* の項。
- 47 村川堅太郎氏「民主政期に於けるアテナとアツチカ」(史学雜誌五十二ノ一)
- 48 Theorikon をもつた人数は一万八千人位と Boeckh が推定している。(Seatzshausn. II. s. 11)。
- 49 Athenaios, XI. 464; Becker, a. a. O. p. 409 f.
- 50 Becker, a. a. O. p. 410; Dio Chrysost. Or. xxvii. 528. Theophrastos, Char. 30.
- 51 Aristoteles, Athen. Pol. xxiv.